

第 85 回公開シンポジウム

子どもと母の関係イメージと人生の物語 —多文化研究から

◆ プレゼンター

やまだ ようこ

立命館大学特別招聘教授・京都大学名誉教授・日本質的心理学会理事長
／生涯発達心理学

◆ パネリスト

小 林 登

東京大学名誉教授・日本子ども学会理事長／小児科学

◆ 司 会

一 色 伸 夫

甲南女子大学総合子ども学科教授／子どもメディア学

一色：第 85 回子ども学公開シンポジウムを始めます。本日は「子どもと母の関係イメージと人生の物語—多文化研究から」というテーマでお二人の先生をお迎えして進めて参ります。人生の物語は、乳幼児期からはじまる長い生涯です。母子関係を「良い母」「悪い母」と単純化することは危険なのです。同じ出来事でも、どのようなストーリーで眺めるか、人生のイメージと物語によって、ものの見方は変わります。日本、イギリス、アメリカ、韓国など多文化の人々が描いたイメージ画から、親子関係の多様なあり方を考えてみます。

今日はお忙しい中、お二人の先生にお越しいただいております。基調講演はやまだようこ先生にお願いいたします。やまだ先生は、この3月まで京都大学の教授で今は立命館大学特別招聘教授で、日本質的心理学会理事長をされています。ご専門は生涯発達心理学、それからナラティヴ心理学です。簡単なご略歴を申し上げます。名古屋大学大学院博士課程を終え、愛知淑徳大学、京都大学大学院教育学研究科教授を経て、現在、立命館大学で教壇に立っておられます。ご著書は、『ことばの前のことば』『私をつつむ母なるもの』『人生を物語る』などたくさんございます。今、現在、やまだ先生がどんなことに感心をお持ちかということも簡単にお話すると、人生を物語る、ナラティヴ、語り、物語りの研究、特にことばにならないことばを含めたビジュアル・ナラティヴに関心をお持ちで、「私と母の関係イメージ」「人生のイメージ」などイメージ描画の多文化研究をされています。文化比較研究は文化の相違に注目していたのですが、やまだ先生は、日本、イギリス、フランス、オーストリア、アメリカ、ベトナム、韓国など多文化の中で見えてくるイメージや語り方の共通性、相違ではなくて共通性に注目をされています。

パネリストとしてこの子ども学講演会の生みの親である小林登先生にお願いいたします。小林先生は、1998 年から2年間、本学においてになられて、その時に、子ども学という体系を作られ、国際子ども学研究センターをこの大学に創設されました。小林先生は、東京大学名誉教授でいらして、日本子ども学会理事長で、ご専門は小児科学です。また、医師として東京大学医学部小児科教授の後、国立小児病院を歴任されて、チャイルドリサーチネットというインターネット上の研究機関の所長もされています。

す。では、やまだ先生お願いいたします。

やまだ：皆さん、こんにちは。今ご紹介いただきましたやまだようこです。今日は「子どもと母の関係イメージと人生の物語—多文化研究から」ということでお話をさせていただきます。

これ(図1)は、ポスターに出ているイラストですが、私と母の関係イメージの一つで、外側にりんごがあって、中に虫がいるという絵です。大学生が描いた、りんごのお母さんの中に私が包まれているという絵です。このようなイメージ画を私はいろいろな形で研究しています。母子関係イメージ、人生のイメージ、この世とあの世のイメージなど、いろいろなイメージ画を国際比較しています。

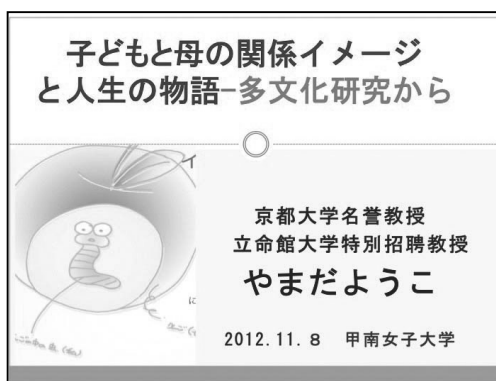


図 1

研究は、図2のような説明で行っています。もし、目の前に1枚の白紙を渡されて幼い時のあなたとあなたのお母さんの関係をイメージして絵を描いてくださいと言われたら、あなたはどのような絵を描くでしょうか。学生さんにやってもらっているのですが、初めは皆、絵なんて描けないと言います。でも、実際に始めると、結構楽しそうに描きます。3枚の絵を描いてもらっています。幼い時と現在と未来の絵です。

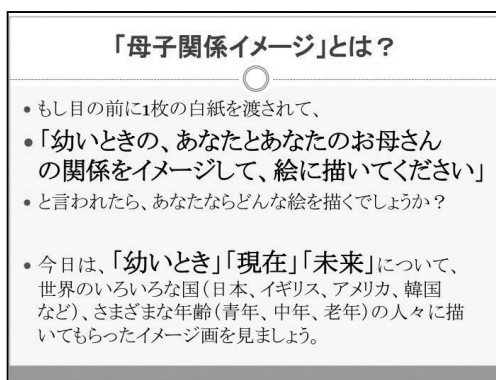


図 2

今日は日本、イギリス、アメリカ、韓国などのいろいろな国、いろいろな年齢の人に描いてもらったイメージ画を皆で見たいと思います。この母子関係イメージで一体何をみるのでしょうか。学問にとって、ものの見方が重要です。何をフォーカスするのが大事なわけです。まず、第一の視点は、図3のように、個人ではなく関係性をみるということです。私の研究では、この絵を描く人はこういうタイプの人、こういう性格の人はこのような絵を描くということを調べようとはしていません。個人差、個人の性格をみるのではなく、この絵でみたいのは「関係

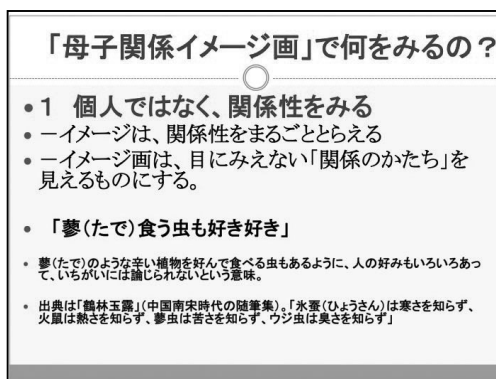


図 3

性」です。イメージは、全体としての関係性をみるのにとっても都合がいい媒体であると思っています。イメージ画は、目にみえないものを目に見えるものに変えてくれます。

私は元々ことばの研究をしてきました。赤ちゃんがどのようにしてことばを話すようになるのかという研究をしてきたのです。そのとき、表に出てきたことばよりもみえないことば、氷山の下にある、「ことばの前のことば」に注目することが大事だと気づきました。この研究でも、イメージ画によって、ことばにならないもの、目にみえない関係に見える形にしてとらえてみたいと思っているのです。

私が好きなことばの一つは、「蓼食う虫も好き好き」です。蓼というのは、辛い草、そんな辛い食べ物でも、好きな虫もいます。要は、同じものも、見方や関係性によって、良くも悪くもなるということです。

第二の視点は、図4に示したように、母子関係を見るとときには、好きなものや相性はいろいろだというふうに多様性を持ってみていくことです。また、良い関係か悪い関係かという価値判断ではみないことです。良い母か悪い母かと診断、評価しないで、いろいろなタイプの多様な関係性がある、どれもOKだというようにみていきたい。どんなイメージも、何を描いてもOKです。

人の心のあり様も関係性もいろいろです。心理学でよくあるように、このような絵を描いた人はこのようなパーソナリティですとか、この人はこのようなコンプレックスを持っているのではないかと、紫色を使う人はどういう性格だとか、診断するための心理検査とはまったく違います。固定観念でものを見ないで、ある一つのものも見方を変えれば良いものになるという見方でみていこうと考えています。ですから、良い母か悪い母とか、勝ち組か負け組かなど、人を評価してカテゴリーに入れるのをできるだけしないで、多様なものを多様なままみていこうという視点です。

母子関係というのは、なぜか情動を駆り立てるものがありまして、いろいろな神話もまつわりついています。なるべくそのような神話を取り払ってみていこうと考えています。「人生いろいろ」という歌がありますが、男も女もいろいろです。割れ鍋に綴じ蓋という関係もあります。割れた鍋は役に立たないけれども、組み合わせや、用途によっては役に立つと考えます。

母子関係もいろいろで、非常にたくさんの関係がある。生態学的にみても、多様性があるほど良い。地球には、一見すると、この小さな生き物が何のために役に立つのか分からないようないろいろな生き物がいるのですが、多様性があるほど、自然の中では、いのちが残りやすい。だからあまり純粋にこれが良いからと、そればかりに狭めていくのは危険だろうと思っています。母子関係も同じです。

第三の視点は、図5の「こころのかたち」の共通性をみることです。先ほども一色先生に紹介していただいたように、これは重要な私の視点です。一般に文化比較というと、どこどこが違うかという違

「母子関係イメージ画」で何をみるの？

●2 母子関係の多様性をみる

- イメージ画は、価値フリーで、何を描いてもOK。
- 人の心のあり様のいろいろ、関係性の多様性を見る。
- 一人のパーソナリティや個性「このような絵を描いた人はどのような人か」をみる心理検査ではない。
- 固定観念でものを見ない。
- 「良い母」見方を変えれば「悪い母」、「悪い母」見方を変えれば「良い母」
- 「母子関係」をとりまく神話、価値軸の固定を疑ってみよう。
- 人生いろいろ、男と女もいろいろ 「割れ鍋に綴じ(修繕した)蓋」
- 母子関係もいろいろ
- 多様性(たようせい)とは、幅広く性質の異なるものが存在すること。(多様性のある生態系は生き残りやすい。)(cf. 個性)

図 4

いに強調点を置きます。どうしてかという、比較して違いを出してものをみていく。これは、心理学だけではなく、学問がそのような方法論を持っていました。文化比較は特にそのようなところがありました。文化の違い、世代の違いなども大事ですが、私はどちらかというと、コモンのもの、共通性の方に目を向けていきたいと考えています。元々私は、コミュニケーションを研究しているのですが、コミュニケーションということばは、コモン、共通のものを作り出していく営みと考えています。私たちが多様でありながら共通であるというものの見方が大事ではないかと思っています。

イメージ画の研究では、共通する基本形を踏まえながら、しかし多様である、ズレがある、バリエーションがあるというのを楽しんでいく。だから似たもの同士でもいろいろあるというのが、私の研究のキャッチフレーズです。私たちは皆似たもの同士で、よく似ている。目があり、鼻があって、口がある。遠くからから見ると皆同じように見える。でも、一人ひとり顔も姿も違う。人の心は多様で複雑、しかし、基本形もある。共通性で見ていこうというのが3つ目の視点です。

第四の視点は、図6に示したように、ナラティヴ研究の視点です。ナラティヴは、日本語では物語と訳されますが、イメージからどのような物語を作っていくのかをみていこうとしています。過去と現在と未来、幼い時と現在と未来のイメージ画を描いてもらっていますので、このような時間軸でどういうふうにライフストーリー、人生の物語が作られていくのかをみていこうとしています。過去が現在をつくる幼い時は、とても大事なことで、それには、異論はありません。ただし、幼い時に、何か間違ったらすべて人生間違ってしまうかというところではなくて、私たちは、未来から逆に現在をつくっていく部分もある。イメージが現実をつくる。未来にどういうイメージを描くかというのも大事であるという見方でみていこうと思っています。

「母子関係イメージ画」で何をみるの？

●3「こころのかたち」の共通性をみる

- 一文化の違い、世代の違いに注目するよりも、「共通性」に目を向けよう。コミュニケーション(**communication**)
- 一「共通する」基本形をふまえながら、ズレのある変異やバリエーションを楽しもう。似たものどうし、でもいろいろ。
- 一人のこころは多様で複雑である。
- 一しかし、人が思い描く「こころのかたち」の基本形には、共通性がある。

図5

「母子関係イメージ画」で何をみるの？

●4 イメージでつくる「物語」をみる

- 「過去」-「現在」-「未来」の時間軸でみるライフストーリー
- 一「過去」が「現在」をつくるという因果関係の物語から脱しよう。
- 一「未来」に向かってどのような物語をつくるかが重要。「未来」が「現在」をつくる。イメージが現実をつくる。

図6

それでは実際のイメージ画を見ていきたいと思います。図7に示したように、9つの母子関係の基本形を考えています。まだまだたくさんあるのですが、少し単純化してお話します。この基本形はカテゴリーではありません。分類するわけではありません。あなたは「包む」タイプですとか、あなたは「支える」タイプですとか、型に分ける分類ではありません。

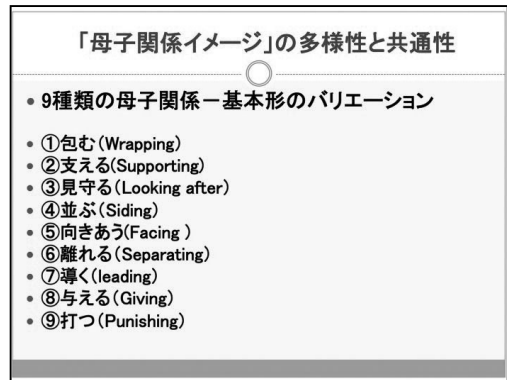


図7

図8はネットワークモデルと呼んでいるのですが、ネット、網目のモデルの中の一部、例えば、「包む」、先ほどのりんごの絵はこちらに入りますが、お母さんのりんごの中に私の虫がいる。それは、「支える」お母さんや「並ぶ」お母さん、「見守る」お母さんなどとネットでもすばれています。このむすびつきを見ていくのです。むすび目には基本の形があります。その基本の形を今、9つぐらいに分けています。みんな関係していて、つながっている、むすばれています。だからネットワークモデルと呼んでいます。

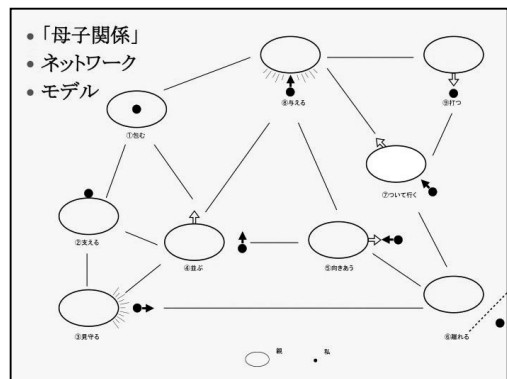


図8

図9は、実際の絵です。単純化し、典型的なもののだけを出しています。これは、「包む」関係イメージで、お母さんの中に自分が包まれています。絵の下は、説明文です。左側は、日本の大学生が描いた絵です。右側はイギリスとアメリカの大学生が描いた絵です。見ていただくと分かりますが、非常によく似ています。同心円は包むパターンの基本的なもので、お母さんの中に私がいます。人間の形をしているもの、あるいは、お母さんの中に卵があつて、更にその中に私がいるというものもあれば、先ほど

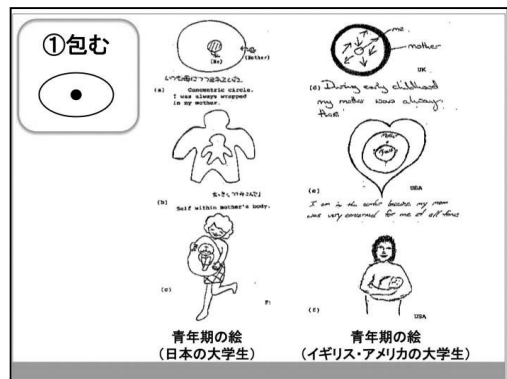


図9

例に出したりんごの絵もあれば、お饅頭のようなお母さんの中に自分が包まれている絵もあります。包まれているからといって、いつも暖かいわけではなくて、檻のようなお母さんの中に自分が外に出たいけれども出られないという包む形もあります。ですから、いろいろなバリエーションがあります。いずれにしても、お母さんの中に私が包まれているという構図になっています。イギリスやアメリカの絵も同じ

です。ハートの形、いろいろな形ですが、すっぽりお母さんの中に包まれているというイメージです。

図 10 は、「支える」関係イメージです。親亀の上に小亀がいる、大きな木の後ろに私がいる、大きな頼りがいのあるお母さんにくっついてる男の子の絵などいろいろあります。右側がイギリスとアメリカの学生の絵で、左側が日本の学生の絵です。非常によく似た構図です。支えられ方は、下から支える、後ろや横から支えるなど、いろいろな支え方があります。いずれにしても、お母さんに支えられています。

ついでながら、日本の大学生の絵は、とても上手です。皆、漫画で鍛えられているからではないかと思うのですが、イメージ画を海外に持って行って、発表すると、皆、日本の大学生の絵をみてすごいといいます。そして、この親亀の上の小亀が大好きという人が私の研究室にきて、ほおずりしていました。ここに出しているのは、海外の絵でも上手な方です。上手、下手をみるものではありませんが、やはり日本の学生は、絵が巧みです。ただ絵を描く技術というだけではなくて、意味や感情を単純な絵の中によく表わしているという意味です。

図 11 は、「見守る」関係イメージです。親船が後ろから小さな船が出て行くのを見守っている。バックアップしている感じです。子どもが外へ出て行くのを後ろから見送る、子どもが遊んでいるのを後ろから見守っているなどの絵があります。

図 12 は、「並ぶ」関係イメージです。お母さんと私が並んで仲良く手をつないでいます。並ぶ関係の絵はとても多いです。並ぶイメージでは、対等という意味が強調されることも多く、わざわざ秤の上に載っていて、親子がほとんど同じ大きさで描かれています。アメリカの学生でも、わざわざクローズと描かれています。そして、同じぐらいの秤の上ののっているという絵です。イメージの共通性をみていただければと思います。

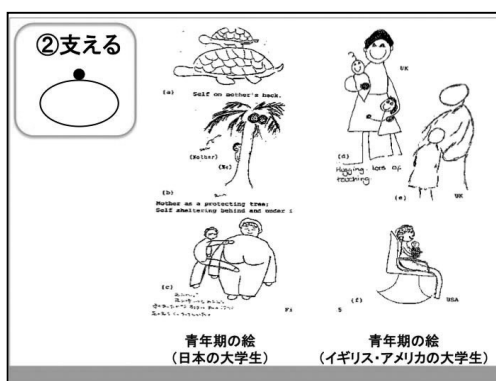


図 10

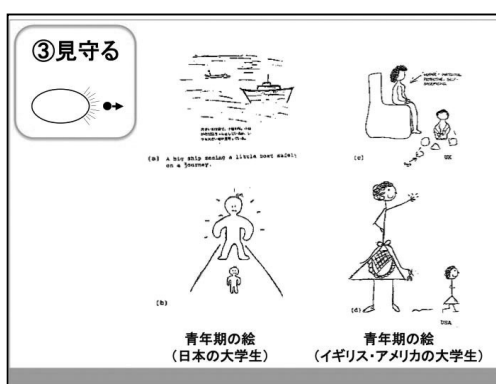


図 11

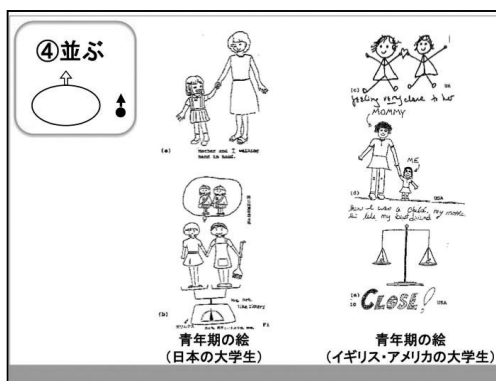


図 12

図 13 は、「向き合う」関係イメージです。お母さんと私がお互いに対面し合っている。実際にはいろいろなものがあります。こたつの中でお母さんと私がみかんを食べながら話をしている絵とか、ここには単純なものを出しています。右側はイギリスとアメリカの学生の絵で、お互いに話をしているとかお茶を飲んでいる絵です。イギリスでは、お茶の時間がとても大事ですので、よく出てきます。オーストリアの学生ですと、お茶のかわりに、お酒を乾杯する絵になっていたりします。皆さん、もし自分だったらどのような絵を描くでしょうか。実際に描かなくても、見ればどの関係もよくわかると思います。

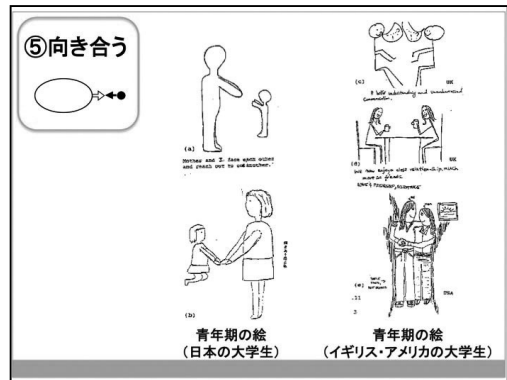


図 13

図 14 は、「離れる」関係イメージで、お母さんと私とのあいだに距離があるという関係です。紙面は A4 の大きさですが、母と私は両隅に小さく描かれています。子どもの姿は、少し見にくいかもしれませんが、膝を抱えて背を向けて坐っています。離れていくお母さんは、足元しか見えません。互いのあいだには、大きな距離があることが強調されています。右上は、アメリカの学生の絵ですが、自分とお母さんとの距離を表すためにぐるぐる長い道をわざわざ描いています。いろいろな距離の表し方があります。右下は、イギリスの学生ですが、あいだに大きな海があり、親子が分かれています。そういう形で距離を表しています。左下は、日本の学生の絵で、非常に絶妙です。二人の距離が必ずしも物理的に、広いわけではないのですが、この学生は、目だけでお母さんの方を見ている。口がない。そして、お母さんは非常に厳しい表情で背中を向けている。少し下がり目で、この表情だけでこの二人の関係がよく分かります。これも距離がある、離れている関係だと思われます。

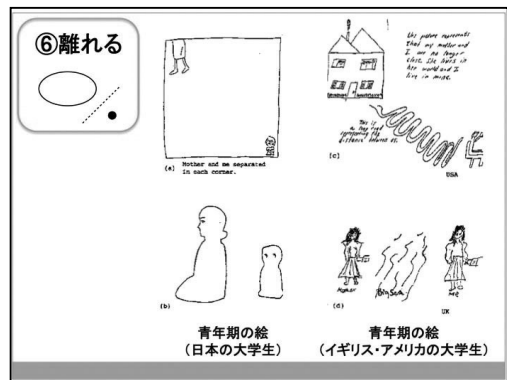


図 14

ついでながら、イメージ画に現れる身体表現は、ここでは深くは触れませんが、非常に微妙だけれども絶妙なところがあります。目一つ、表情一つで、微妙な身体表現を伝える力がイメージ画にはあります。お母さんは、身体全身ではなくて、足元だけしかない。あるいは、口がないなど。イメージ画のおもしろさは、このような絵そのものから、個々に質的に伝わってくるものです。私は質的心理学研究をしています、一つ一つが訴えてくる。ただ、数を数えて統計をとるのではない、質的研究、イメージ画のおもしろいところです。

図 15 は、「導く」関係イメージです。お母さんが前に行くのを私が追いかけて行く。あるいは、非常に偉大で大きいお母さん（富士山）を私が仰ぎ見るという関係です。お母さんがどんどん先に行つて、私が背中を追いかけるものもあれば、お母さんが、こちらにおいでとガイドしてくれる場合もあります。右下は、お母さんの足がこんなに大きいのに自分は小さいというような形で示しています。並ぶ関係イメージが対等に近かったのに対し、導く関係では、偉大なお母さんに自分が導かれて育っていくイメージです。

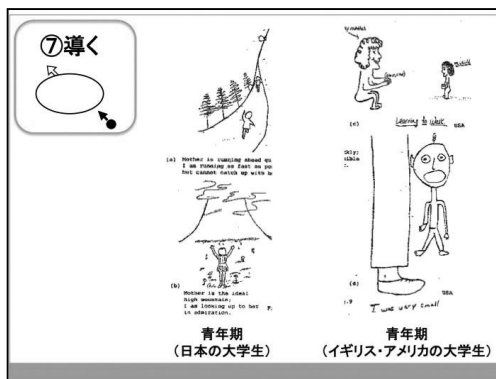


図 15

図 16 は、「与える」関係イメージです。何かの恩恵が与えられる。左も右も上は、自分がお花で、太陽の光を注いでくれるというイメージです。左下は、端的にお金をくれるというものです。右下は、アメリカの学生ですが、表彰台の上でご褒美をもらう。そのように何かをしてもらう、与えてくれるという関係性です。

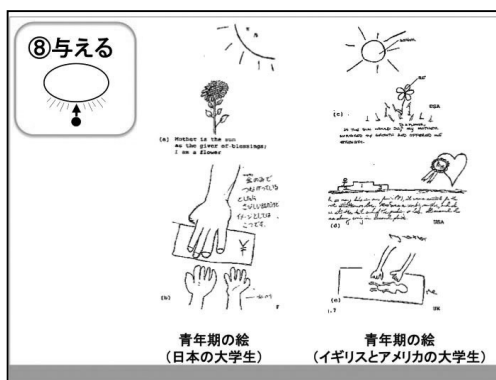


図 16

図 17 は、「打つ」関係イメージです。お母さんが私を打ちつける、ある意味で厳しいお母さんの像です。非常に大きいお母さんが私を睨み付けたり、駄目でしょうと指で指し示したり。右は、アメリカの学生ですが、お尻を叩いたり、指で指し示したりしています。

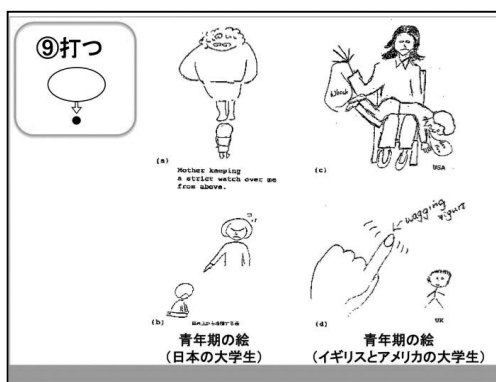


図 17

それぞれの絵には、いろいろなバリエーションがあります。例えば、先ほど言いましたように「包む」関係だからいつも良いというわけではなくて、「包む」のネガティブなイメージとしては、母は檻のように、目だけが輝いていて、自分はその中で見張られている籠の中の鳥というようなイメージの「包む」もあります。「並ぶ」関係では、手をつないでいる絵が多いのですが、鎖でつながれていて自分は犬のようだというイメージもあります。

今回は、比較的ネガティブに見える「打つ」イメージの多様性を見たいと思います。

図 18 は、幼いときの「打つ」関係のバリエーションです。これからお見せする「打つ」絵は、すべて日本の学生が描いたものです。左上は、「並ぶ」関係に非常に近い「打つ」です。お母さんは手をあげていますが、同じ地平線上にいて子どもと似たおむすびのような形で、あまり怖そうではありません。イメージ画では、身体表現だけではなく、空間の使い方もおもしろいです。「打つ」関係ではお母さんが怖くなるほど、だんだん上に上がっていきます。お母さんは、並ぶ位置から、斜め上になり、真上になります。

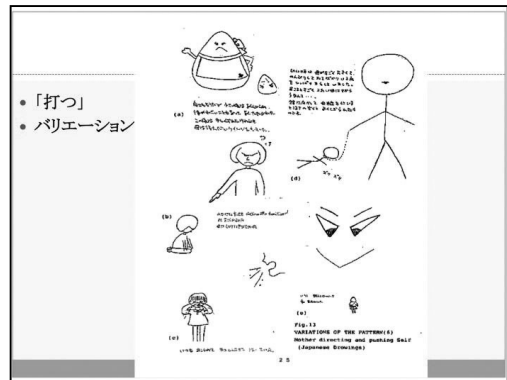


図 18

左中は、お母さんが私を怒っている絵ですが、指で指し示されて駄目でしょうと言われ、私は跪いてごめんなさいと言っています。お母さんの下半身は消えていて、私と同じ地平線上にいません。だんだんと、お母さんが部分化していきます。左下は、お母さんに怒られて泣いているところです。お母さんは口だけで怒鳴っています。やはりお母さんは同じ地平線上になくて、斜め上にいて、ガミガミ言う口だけ残して、身体は消えています。右上は、もっと怖いお母さんです。これも斜め上の関係ですが、なんとお母さんは口紅しか描かれていません。怖いです。お母さんが化粧をして出て行く。自分はずると引っ張られています。

右下は、真上の関係です。自分は豆粒のように小さくて、大きいお母さんの目はぎらぎらし、上から睨み付けられている絵です。口も巨大で、身体の大きさに差が誇張されています。お母さんの身体や顔の形も消えてしまって、巨大な目と口だけが描かれています。

図 19 は、「打つ」バリエーションのつづきです。お母さんが上にいて睨み付けている絵では全身が描かれていますが、もっと怖くなると、人間の形さえなくなるとい感じず。右上は、教育ママゴンが私を引き裂いている絵です。左下は、真っ暗闇で私はひび割れて震えている卵のように描かれています。お母さんは形をなくして、暗闇に形を変えています。右中は、正に「打つ」絵で、金槌のお母さんと釘の私です。右下は、雷ですが、お母さんが自然現象に変わってしまっています。このように、並ぶ位置から上へ移行する、人間の形をなくしていくという変化があります。すべての基本形にいろいろなバリエーションがあるのですが、今回は、「打つ」というあまりハッピーではなさそうな関係性を特にとりあげてみました。

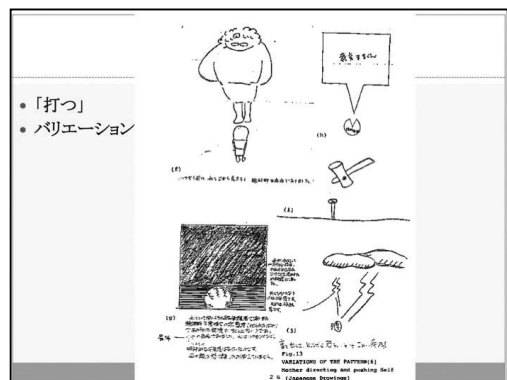


図 19

今までは、イメージ画に描かれた親子関係の多様性を見ていただきました。次に、図 20 のように、「母子関係イメージ」の人生物語、ライフストーリーを見ていきたいと思います。それを私は、「ビジュアル・ライフストーリー」と呼んでいます。イメージ画は、3つの時間、幼い時と現在と未来、時間軸にそった3つストーリーで描いてもらっています。それを見てみると、どのような人生物語になるのでしょうか。

まず、物語とは何かについて簡単にお話します。日本語の物語よりも、ナラティヴやストーリーは、もっと

と広い意味です。日本語で「物語」というと、フィクションと思われがちです。英語では、「昨日あったことを話してちょうだい」と言うのに、ストーリーということばを使います。だから、昨日あったお話とは、昨日あった出来事を話してというのに近いと思います。

物語をブルーナーのことばで定義すると、経験の組織化（organization of experience）になるでしょう。オーガナイズには、組織化する、有機化するという両方の意味が含まれます。経験を有機的にむすびつけること、編集することが物語です。昨日あったいろいろなことがある中で、私たちは、そこから選び取って、編集作業をして経験を組織化しているのです。それはフィクションを作るという意味ではありません。「昨日何があったの?」と聞かれた時に、「昨日は朝起きた時にお布団や毛布を直して、それから、歯を磨いて、でも、歯磨き粉が少し出過ぎて」など、起こった出来事を延々と微細に語ることをしません。私たちは、相手との関係の中で大事なことをピックアップして選んで、それをオーガナイズして、編集して、そして物語っています。だから、私たちは常に、あったことをすべて記憶に残すというのではなくて、あるものを選びとって、経験を組織化している。だから、ここでいう物語は、フィクションを作るというのではなくて、私たちは常にそのような物語化をして生きている。経験を編集している、あるいは意味づけています。それが「物語」ということばの意味です。

私の研究では、幼い時と現在と未来の関係をどのように物語っているかを調べました。みなさんは子ども学を学んでいるわけですが、子ども時代は言うまでもなくとても大事な時代です。ただ、発達心理学の功罪があり、子ども時代に過大な焦点を当てすぎた傾向もあります。特に精神分析などですが、乳幼児期の体験が将来一生にわたって影響し、幼児期の体験は、あとで、取り返しがつかないというイメージを広めすぎたのではないかと思います。もちろん、赤ちゃん時代も乳幼児期も、子ども時代の体験はとても大事です。けれども、最近の生涯発達心理学の研究では、人生全体を見渡した時に、乳幼児期だけではなく、大人になってからの体験も重要である、発達のどの時期も大切なことがわかってきました。人間は柔軟性、可塑性を持った、柔らかい存在なので、自分で自分を変えていくこともできるというのが最近の生涯発達心理学の知見です。ですから、一度出来上がってしまうともう二度と戻らないという部分もありますが、他の部分はもっと柔軟に変化していくことができます。

「母子関係イメージ」の人生物語

- 3つの「母子関係イメージ描画」による人生物語
(ビジュアル・ライフストーリー)
- 「物語」とは？－経験の組織化
- 「過去（幼いとき）」－「現在」－「未来」の関係
どのように物語る（組織化）するか？
- 人生は長い。生涯発達心理学から見ると、幼児期だけではなく、他の時期も重要。同じ出来事も、どのような物語のなかに入れるかによって「意味」が変わる。

図 20

特に大事なものは、経験にどのような意味を持たせるかということです。同じ経験でも、どういう物語、どういう組織化をするかで、意味が変わります。このような見方で、先ほどの「打つ」関係イメージの人生物語を見てみたいと思います。

先ほどは、日本の学生とアメリカとイギリスの学生の絵を見ましたので、今度は韓国の学生の絵を見てみたいと思います。いずれも共通性に注目しているので、同じような絵をどこの文化の学生も描きます。

図 21 は、幼い時のお母さんと私のイメージです。これも「打つ」お母さんで、かなり怖いです。お尻を叩かれて泣き声をあげています。では、現在はどのようなのでしょうか。従来の子ども研究、幼児研究では、子ども時代だけに注目してきました。その後その人たちが、大人になったとき、どうなるのかということは、なかなか研究されてきませんでした。



図 21

図 22 は、現在の絵、大学生です。幼い時の関係が嘘のように二人は向き合って笑っているという関係になっています。



図 22

図 23 は、未来の絵です。この学生は医学生なので、お母さんを自分が逆にケアをする、サポートする役目が変わっています。このような物語が作られています。だから、幼い時に「打つ」お母さんだから、必ずしも関係は悪く、ネガティブになるという物語にはなりません。

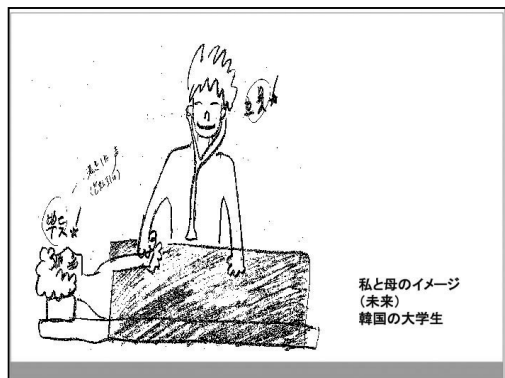


図 23

他の絵も見てください。図 24 も、やはり韓国の学生で、お母さんは結構怖いです。お母さんは棒を振り回していて、自分は泣いていて片目しかない。微妙な身体の描き具合はとても面白くて、両目を描くよりも、片目だけで涙を流しているほうが非常に訴えてくるものがあります。

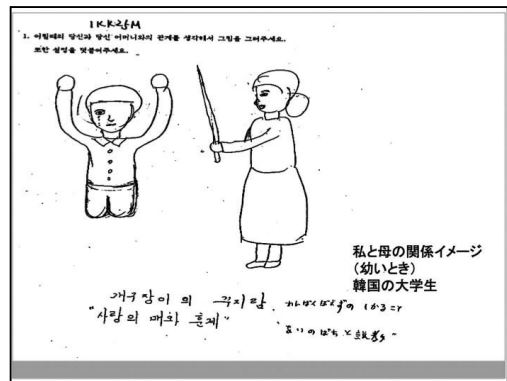


図 24

図 25 は、同じ韓国の学生が描いた現在の絵です。現在も、やはりいい関係ではなさそうですが、これが大学生の自分です。お母さんは自分に期待をかけて、きちんと合格するようにとお祈りしてくれている。その期待が少し重すぎる感じです。この目もとても微妙です。少し横目で睨んで、うざいと言いたい感じです。では、未来はどうなるのでしょうか。



図 25

図 26 は、未来ですが、お母さんが死んだあとに、「お母さんごめんなさい、僕は親不孝者でした」と言って、涙を流しながらお母さんに謝するという図式になっています。やはり、お母さんとの関係をだんだんと修復しているという感じでしょうか。私たちにもよく通じるし、よくわかる物語だと思います。未来は関係を改善するような物語になっています。このようにして、私たちは、物語の力で関係を改善していくことができるということを、今回、皆さんにお伝えしたいと思います。



図 26

今までは大学生の絵でしたが、中年や老年の方にも描いてもらっています。図 27 は、中年の 45 歳の女性が描いた幼い時の絵です。お母さんと私の関係を描いてもらったのですが、お母さんの姿はなく、お母さんは家そのものになってしまっていて、家の 2 階から響くガミガミという声だけが描かれています。私とお父さんは、家から出されて外におり、居場所がないという感じでしょうか。単純ですが、とてもよくわかります。「いつも叱られてばかり、今日も母の機嫌は悪いよう。父の後ろから小さくなって家に帰りました。母は不満、愚痴の多い人でした」という説明がついています。



図 27

図 28 は、この方の現在の関係です。お母さんは亡くなっていますが、「今は母の気持ちがわかる年齢になり、ご苦労様でしたと手を合わせる毎日です」と説明されています。あの時怒っていたのは、お母さんなりの事情があったのだろう。お母さんの気持ちがわかる年齢になったという物語です。

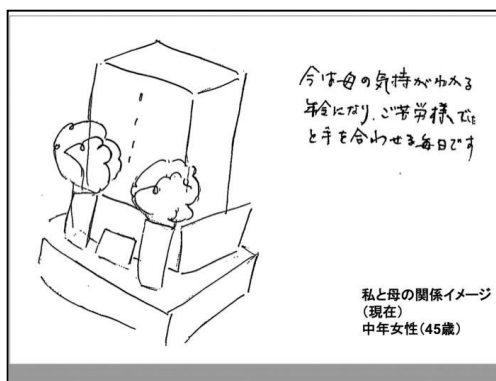


図 28

図 29 は、未来の関係です。私が死んであの世で母のところに行ったら、手を引いて道案内をするだろうという物語になっています。ですから、まだ三途の川で隔てられているのですが、「向き合う」関係に変わり、お母さんも初めてお母さんらしい身体を持ち、対面している形で描かれています。

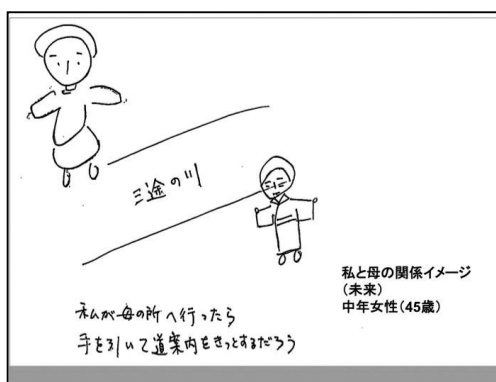


図 29

図 30 は、老年期、80 代の男性の絵です。幼児期は、昔の生活を思わせるものですが、おねしょをして「おかあちゃんごめんなさい」と謝っています。でも、大丈夫よとお母さんが抱いてくれているという「支える」イメージです。

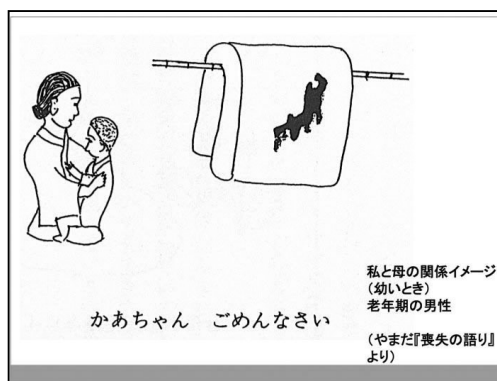


図 30

図 31 は、同じ男性の現在です。もうお母さんは亡くなっているのですが、亡くなったお母さんと不在のコミュニケーションを持っています。これは、イメージのおもしろさと強さです。ここにはないものをイメージすることができる。イメージやことば、そして、物語は、今ここにはないものを作り出すことができます。その物語の力で、逆に現在の出来事を変える力を持つことがあります。この絵では、お母さんがもう亡くなっているわけですが、そのお母さんが今でも危機のときには、現れてきて、天国のお母さんが「危ない気を付けなさい」と助けてくれるイメージです。年をとってもまだお母さんが助けてくれるとイメージされているのです。

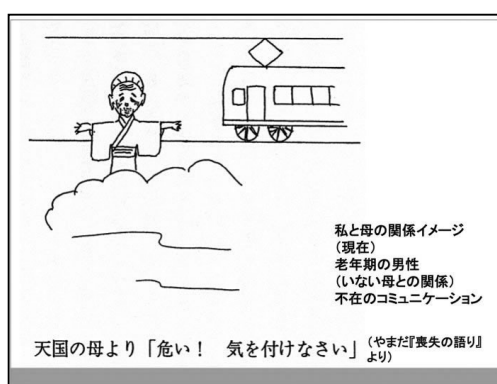


図 31

この方の未来はどうなるのでしょうか。図 32 は、未来です。お母さんをおんぶして天国のきれいなお花などを見せて孝行したいという物語になっています。面白いのは、自分と同じようにお母さんが亡くなっても年を取っていくように描かれていることです。自分が天国に行く時にはお母さんは、更に老いた姿になっています。不在のコミュニケーションは、相手がいなくなっても、生きて続いているのでしょうか。



図 32

図 33 は、不幸な幼少期が描かれていると思われるものです。アメリカの大学生が描いた幼い時のイメージですが、お母さんは乳がんで寝ており、私はいつもお母さんの病気の世話をしていました。お母さんの便器を空にしたり、お母さんの吐しゃ物をきれいにしたり、そういったお母さんのお世話をして、自分はとても寂しかったというイメージ画です。父は仕事の関係で留守がちで、病気のお母さんの世話をした子ども時代、お母さんに世話されるどころか逆に世話しなければならなかったという寂しい辛い少女時代でした。



図 33

図 34 は、現在です。お母さんは亡くなっているのですが、「母は死んでしまったので、私の母と関係性を持っているということは難しいのですが、母が私を上から見守り慰めてくれることを知っています。私は今も母と話をします。相互性を感じることは難しいですが、でもお母さんは天国にいて、私たちと話をします」と説明されています。まだ母と私のあいだに線が引かれていますが、お母さんは前よりも自分を見守ってくれる関係に現在は修復されています。

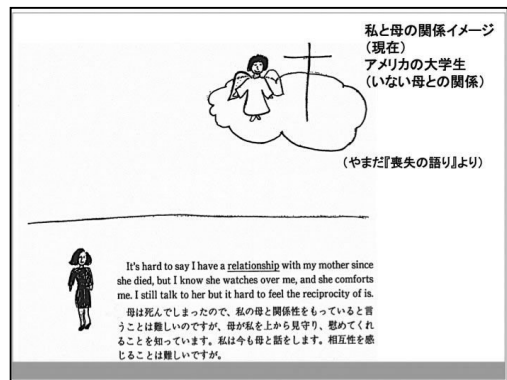


図 34

図 35 は、未来です。破線ではありますが、お母さんと私がハートで結ばれるというお話になっています。「私は母と現在も未来も関係性をもっていると言いにくいですが。私はいつも母を思い、母がいなくて寂しいと思っています。母が私を見守ってくれて、私たちは心の中でいつも結ばれているだろうと思います」。願望に近い物語ではありますが、幼い時の不幸な自分関係を、不在のコミュニケーションによって、自分のイメージの中で修復している物語です。さて、このように、さまざまな物語、いろいろなバリエーションの、幼い時と現在と未来の人生物語の例を見ていただきました。

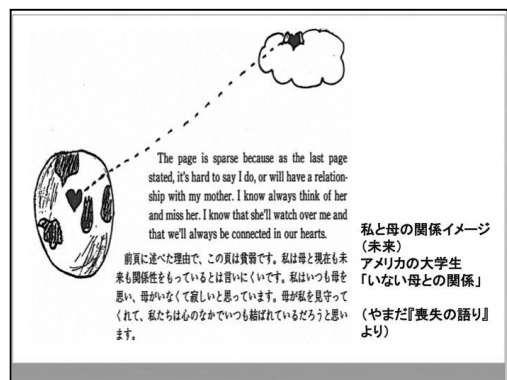


図 35

最後にまとめです。図 36 は、こころのかたちの
 共通性と多様性についてです。「多文化研究をする
 とき、私の方として、文化の違いよりも、共通性
 をみることが大事ですよ」とお話しした後で、「と
 ころで先生、日本とイギリスの絵はどう違いますか？」
 と質問されることがあります。それくらい、「文化の
 相違」に着目する見方が、根強いのでしょう。もち
 ろん、違いもありますが、文化の違いにかかわらず、
 あるいは世代の違いにかかわらず、不思議なぐらい
 よく似た絵が描かれています。それでいて、絵は一
 つひとつ個性的で、一人ひとりの個性もよく見えてく

ると思います。先ほど言いましたように、コミュニケーションというのは、共通のものをつくる営みと考
 えられますので、私たちは共通性を見ていくことで、もっと平和にお互いの関係を認め合えるのではな
 いかと思っています。人の心は多様で複雑だけれども、案外基本の形は共通性がある、大きく見れ
 ば私たちはよく似ていることです。しかし、大きく見れば似ているということを踏まえながら、その微妙
 な違いとか微妙な重なりなどのバリエーションを見ていくことの面白さがあります。本当に一つとして同
 じ絵はありません。微妙に違います。そして、一つひとつ味わいを持っています。意味ということばに
 は、「味」という漢字が入っています。意味とは、認知的なものだけではなくて、味わいを持っていて、
 それは一つひとつの絵、一人ひとりの人間、その人でないとかもし出せない雰囲気などがあります。

もう一つは、価値観にとらわれないで見ていくことが大事です。白か黒か、良いか悪いかではなく、
 複数の見方を併用して、ズレを持ちながら多様なかたちが変化していくプロセスを見ていくことが大切
 です。幼児期に同じような経験をして、本当に辛いお話になっていく場合もあれば、そうでないお話
 もある。いくつかの見方を重ね合わせて見ていく。場合によっては、矛盾があるものも含んで見ていく
 のが私の見方です。

図 37 は、未来をつくるイメージや物語の力につ
 いてです。イメージや物語の力、ことばの力は何か
 を考えると、「今ここにないものを表象する」ことが
 できることでしょう。だから、過去が現在をつくっ
 て現在が未来をつくるという順番に、直線的に時間
 系列が進むとは限りません。原因があるから結果が
 あるという、因果的な物語だけではなくて、未来が、
 逆転しUターンして、現在をつくる場合もあるの
 です。もうここにないものや不在のもの、未来が現在
 をつくることのできる、これがことばの力、物語の力、

「こころのかたち」の共通性と多様性 複数の見方の重ねと両行

- 文化の違い、世代の違いを強調するよりも、「共通性」に目を向ける。コミュニケーション (communication) とは共通 (common) のものをつくる営み。
- 人のこころは多様で複雑である。しかし、人が思い描く「こころのかたち」の基本形には、驚くほど共通性がある。
- 「共通する」基本形をふまえながら、ズレのある重なり変異やバリエーションを見る。人間は似たもののどうし、しかしひとつとして同じ絵はない。
- 価値観の変革。新しい見方に変えるのではなく、複数の見方を重ねて両行する。

図 36

未来をつくるイメージと物語の力

- 「過去」が「現在」をつくるという直線的時間や因果関係の物語から脱しよう。
 (cf. 過去経験 (幼児期体験) → 現在 → 未来)
- 「未来」に向かってどのような物語をつくるかが重要
 「未来」がターンして「現在」をつくる。
- イメージが現実をつくる。
- 不幸な幼児期でも物語の意味づけを変えられる。
- 「ない」ものがはぐくむイメージと想像力。
- 「不在のコミュニケーション」

図 37

イメージの力でしょう。今ここにないもののイメージが、現在をよりポジティブに変えたり、より心地いいものに変えたりする力を持っています。だから、現状は非常に悲惨でも、そういう物語の力、イメージの力で、現状を少しずらして見たり、逆転して見たりすることができます。それが、ことばの力であり、イメージの力であり、物語の力だろうと思っています。だから、特に未来に向かってどういう物語をするかが非常に重要だと思います。ジョン・レノンの「イマジン」という歌がありますが、イメージが現実をつくっていく、それは本当に夢のようなものだけれども、そういう夢を描くことで、現実が変わっていくということが、現実には私たちの生活の中であるのではないかと思います。不幸な幼児期でも物語の意味づけを変えていけるでしょう。それから、不在のコミュニケーション、ないものを育むイメージや想像力が私たちをつくっていくのではないかと思います。

最後に、図 38 は、さらに学びたいという方のために、いくつか参考文献をあげておきました。関心がある方は読んでください。では、これで終わりにいたします。

参考文献
• やまだようこ, (1988). 『私をつつむ母なるもの—イメージ画にみる日本文化の心理』, 有斐閣. • やまだようこ, (2007). 『喪失の語り—生成のライフストーリー (やまだようこ著作集第8巻)』, 新曜社. • やまだようこ (編) (2010). やまだようこ・戸田有一・伊藤哲司・加藤義信. 『この世とあの世のイメージ—描画のフォーク心理学』, 新曜社. • やまだようこ (2012) 『世代をむすぶ—生成と継承 (やまだようこ著作集第10巻)』, 新曜社.

図 38

一色：やまだ先生、どうもありがとうございました。イメージ画の力、パワーを感じさせていただけるお話でした。では、このやまだ先生のお話に対して、小林先生からコメントをいただきたいと思います。小林先生、よろしくお願いいたします。

小林：やまだ先生、いいお話をありがとうございました。このような考え方で、私自身も考えたことがなかったので、たいへん勉強になりましたし、それなりに今後のできごとをいろいろと考えるのに、有用な情報をいただきました。

先日、ある会で、箱型の小さなキューブをもらって、そこに、小さい時に自分が幸福に感じたことと、現代最も幸福であると感じていることと、将来こうあって欲しいと幸福に感じていることを描いて、すると六面体なので、あと3つ残ります。そこを適当なもので埋めなさい。それを皆で話合って、そのグループが寸劇、ドラマみたいなものを作るというのをやりました。その時は、イメージという図がないのです。文字だけで書いてある。例えば、子どもの時にどういうことをして嬉しかったようなことが書いてあるだけなのです。今日のお話は、それを超えて、図が入ってくる。もちろん、上手下手いろいろありますが、そこには図というものが入ってきて、そこが大きく違いますが、もし、図で結びつけることと、文字で結びつけることの違いをどう考えたらいいいのかが、先生のお話を伺って、感じました。言語だと日本語で

書いた場合と英語で書いた場合でまた違ってくるのではないかと思います。日本語は、漢字 プラス 仮名という文字がある、それを組み合わせてやっていることは、意外に人間の心を動かすのに重要な役を果たしているのではないかと最近ちらりと思ったりしたのですが、イメージと物語という発想から展開していった、そういうことに対することを教えていただければと思います。

一色：ありがとうございました。では、小林先生がおっしゃったことをやまだ先生にお返して、今日のテーマである、イメージ画、物語について、深めていきたいと思います。やまだ先生いかがでしょうか。

やまだ：小林先生、ありがとうございました。難しいご質問ですが、とても本質的で、核心をついた質問をいただきました。文字で書くことと絵で描くこと、あるいは、言語で語ることと描画やイメージで語ることには、やはり大きな違いもあるような気がします。私はナラティヴ(物語)の研究をしているわけですが、海外、特に私たちがよく読む文献は、ヨーロッパやアメリカのものですが、ほとんど絵が入ってきません。本当に言語だけで論理を構築する文化なのだと思います。私はあえてビジュアル・ナラティヴを強調しているのですが、ことばの一種として絵を使おうという発想がありません。

フランスでも、このようなイメージ画を描いてもらっています。私たちは、フランスというと、美術が盛んで、とてもビジュアルな文化だと思っています。しかし、美術専攻の学生は別ですが、一般的な学生は、大人になると日常的に絵を描いたりしないようです。それくらい、ことばで論を構築することと描画は遠いのです。幼い時に誰もが描いていたイメージや描画は、大人になると切り離されます。その代わり、論理的にきちんと言語で議論を構成していくのはとても得意になります。そのような文化の違いがあると思います。

実際に日本とフランスで描いてもらおうと、両方共、絵は描けるのですが、日本の学生は、絵が主体で、ことばでの説明は、ほんの付け足し程度です。フランスの学生は、絵は貧弱ですが、こういう理由で私はこうして、だからこうなのだという説明を長々と書いてくれます。私たちは、漫画もそうですが、イメージやビジュアルに適した表現系を文化の中で持っているのではないかと思います。

言語と描画の違いですが、やはり言語でないと論理を構成することはできません。イメージはぱっと直感的にわかります。しかし、だからどうなのかというのは、やはりことばで論を立てる必要があります。たとえば、最初の絵を見たときに、なぜりんごの中に虫がいるか?なぜ虫でないといけないのか?「虫」は異物でりんごの害にもなる生きものです。「腹の虫」などいろいろな日本語と組み合わせて、「虫論」をすると、「りんごの中の虫」の意味がより明確になります。そういった論理は、言語で組み立てていかなければなりません。

ただ、私たちが持っている直感力やいろいろなものを統合して、一つの表象で表すのには、ビジュアルな表現は非常に優れています。科学の世界でもたくさんの数字の羅列よりも、1つのグラフにすると、端的にわかります。やはり図的な表現は全体をつかむのに、非常に強力な力を持っています。

一色：ありがとうございます。小林先生いかがでしょうか。

小林：大変貴重なご意見をいただき、イメージにはどうしても文化が入ってくるのではないかと思います。ことばにすると非常に厳密に論理的に構成できるかもしれないけれども、図にすると文化が入ってくるのではないかと。私が若い頃アメリカに留学をしていて、ガールフレンド、ボーイフレンドが集まってパーティをした。私はガールフレンドとペアになって、相手の女性に絵でもって、私の与えられたテーマを伝え、相手の女性に伝え答えてもらう。その時に「詩人」というテーマが出たのです。私がどのような絵を描いたかという、花鳥風月、花が咲いていて、蝶や鳥が飛んでいたり、月があつたりして自然の中を歩いている人を描いたのです。ガールフレンドは、その絵を見て科学者と答えたのです。私は花鳥風月という文化がわからないのではないかと思います。イメージというもののの中には、文化が入ってくるのではないかと思います。

やまだ：その通りだと思います。絵はよくカルチャーフリーといたりします。あらゆるものに文化が入っていて、ことばでも同じであると思います。多分「詩」ということばでは、私たちは「ポエット」だと詩と同じように思うかもしれませんが、「詩」というものでイメージしているものが実はずいぶん違って、翻訳が本当にできるのかと思うくらい実はことばは本当に違っているのだらうと思います。ただ、大雑把にいうと、これがこれに当てはまるみたいにして、翻訳をしているわけです。だからことばも絵も、翻訳するのは難しいのでしょう。

ただナラティブの研究をしていますと、スラングで日常に近いお喋りが語りの素材になります。日常生活に密着しているほど、文化の差異も濃厚で、ことばのやりとりを学会で聞いても理解するのは非常に難しいです。けれども、絵ですと、格段に理解しやすいです。日本人の描いた絵を海外に持っていったとしても、ある程度は理解してくれます。もちろん文化や人によって少し解釈は違いますが、絵の方が直感的に了解しやすいので、やはり絵の方が文化を超えられるのではないかと思います。例えば私たちは美術作品をみると、違うけれども通じ合える、分かりやすいという面があるのではないのでしょうか。

一色：日本では、よく阿吽の呼吸といいます、そういうのは一つの同じベースでイメージを膨らませて阿吽の呼吸ができているのではないかと思います。これから、国際社会で生きていくということになると、やはり文化が違うところで育った人間と色々なコミュニケーションをとらないといけない。そういう時にどのようにコミュニケーションを、学会などでは絵を見ることによって、同じ共通の基盤ができるということがありますが、ことばの方もそれなりにイメージの絵と同じように伝える力も必要ではないかと思うのです。その辺りの調合みたいなものが必要であると思うのです。若い日本の学生たちが社会に出て行って、世界を見つめて、いろいろなことを文化の違いも超えてする時に、どのように今日のご講演いただいたテーマを生かしていけるのでしょうか。

やまだ：難しいご質問ですが、たぶん、絵の持っている良さは、いろいろなものが一つの中に入り込んでいて、だから誤解もあるかもしれませんが、一目瞭然でぱっと見えるということです。画家の小出

植重が言っているのですが、「自分は一目で絵を見たときに、いいか悪いか分かる。これをもし全部説明しようと思ったら、何十巻の書物があるだろう。何十巻の書物を読むためには、膨大な時間も必要だし、場所も必要だけれども、絵は、一つの中にすべてを織り込める」と言っています。だから、ビジュアルな表現というのは、そういう可能性を持っているものだと思います。私たちが何気なくやっているようなもの、江戸時代の浮世絵もそうですし、今の漫画もそうです。外国に行くと、日本の漫画の評価はとても高く、手塚治虫の本を全巻持って本格的に研究している研究者もいます。残念なのは、日本では、マニアックに漫画を読んでいる人は多いのですが、それをアカデミックな対象として、ビジュアルの表現形や物語を本格的に研究している人は非常に少ないです。そう考えるとビジュアルな表現は、まだまだ国際的に見ても、おもしろいと思います。それから、私たち日本文化では、非常に得意な分野で、知らず知らずのうちにセンスを身につけています。ファッションや生け花やデザインなどもそうですが、そういったものをビジュアル・ナラティブとして捉えて、海外に発信していくことができれば、魅力的でしょう。

例えば、京都にいるフランス人が、お弁当箱を「bento」という名前で世界に広めています。一つのお弁当箱の中に彩り良く多種の食材を盛りつける方法も、ビジュアルな表現なのですが、それを私たちは当たり前のようになっています。これを世界的に見た時には、とても美しいし、すばらしいと発信できるわけです。今、インターネットで見ると、フランス人やいろいろな国の人がお弁当箱を買って、そこにパンなど内容は違いますが、自分が作ったお弁当を展示したりしています。弁当箱専門店を日本にいるフランス人が作り出した。そのように世界的な視野から見ると私たちが知らず知らず持っている価値ある文化はたくさんあって、それを外に発信していくことができるのではないかと思います。

一色：やまだ先生は、元々発達心理学できちんと、所謂、言語で子どもたちがどのように発達していくとかのご研究もされてきていらっしゃるわけです。その中で言語と違うイメージ図というようなものを取り入れて、両面のいい面を両方総合して、何かお考えになっているのかと思ったりするのです。その辺りは、今、おっしゃったお弁当箱の話からも感じがするのですが、ご研究としては、今後どのように進めて、西洋の論理とか学問、それと違う新しい日本の学問や論理まで含めてお考えなのでしょうか。

やまだ：この『私をつつむ母なるもの』という今のこの本はずいぶん前に出したのですが、その時の副題が、「日本文化の心理」でした。私たちが何気なくやっていること、イメージとしてはわかるけれども、きちんと言語化していないような宝物を私たちは持っている。それを何とかして、それを言語化して、海外に向かって発信できないかというのが、長年の夢でもあり、まだ実現していない夢でもあります。そういった仕事がしていけたらいいなと思っています。

そして、ナラティブというのは、言語を中心とした文化で、「初めにことばありき」という価値観が根底にあります。ことばで論を構築し、ことばで学問を構築し、ことばにならないものは何もないというようなことば優位の見方、それをひっくり返したいとも思っています。日本の学生を海外に連れて行くと、スピークアウトすることがとても苦手なのです。英語に引け目があるだけでなく、日本語でもものを言

いたがりません。察しの文化に生きていますから、ことばで論を構築するとか、ことばでスピーチをするのは、弱いのですが、そうではないところの強みをもう少し認識して、自覚して、それを海外に向けてもこのように面白いものがあると発信をしていけたらと思っています。私たちは浮世絵の価値をよく知らなくて、海外で価値を発見されたと同じように、漫画も同じようです。海外に行くと、こんなに文化が違って、こんなに日本的な絵なのに、なぜわかるのかとびっくりします。非常に日本的に見えるものでも、案外と通じ合えるものがあるようですし、また、外の視点を入れると、また面白いものを発見できる気がします。そういった仕事をしていきたいと思います。

一色：小林先生、子ども学ということで、子どもの問題を総合的に、多角的にご研究されていらっしゃるのですが、今日のやまだ先生のお話も、何か子ども学にも通じるような部分があるような感じがしますが、いかがでしょうか。

小林：今の一色先生のご質問からは離れるかもしれませんが、ことばも例えば、日本人が使っている漢字は、ある意味、絵みたいなのです。そして、しかも、英語のアルファベットのようないつか、音で表現するひらがな、カタカナを使っています。その2つを組み合わせている言語はなかなかないのではないかと思います。そういうことから見ると、日本のことばは、イメージ的な要素と音の要素を組み合わせた言語であって、非常にユニークではないかと最近思っていて、日本人がなぜ、漫画にしろ、浮世絵にしろ、イメージ的なものがうまく出せるように、そういう感性の世界を育てる力を持った言語ではないかと最近考えています。ですから、子どもの言語発達を見てみると、ことばの前のコミュニケーションの手段というのは、やはり、研究する必要があります。そしてそういうことから、何か新しいことばの解釈がでてくるのではないかという気がします。

一色：今日の子ども学講演会は、必修科目になっていて、これから、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭を目指す学生が多いです。今度は子どもたちを相手にすることになりますが、その子どもから大人までの生涯にわたる全体的な人生の物語と関係して、やまだ先生は、学生がどのようなことを経験して学んだらいいと思われますか。

やまだ：今日は、イメージ画のお話をしましたが、ことばやイメージや物語の力は、ことばを話し始めた2歳ぐらいの子どもでも大きな力を持ちます。私の子どもの例ですが、哺乳瓶を持っていて、いつまで経っても哺乳瓶をなかなか手放せなかったのです。それが、お姉ちゃんの学芸会を見に行くと、自分より半年か1年ぐらい上の子どもたちが「赤ちゃんね。いつまでも哺乳瓶で飲んでいるの」と言われたら、「赤ちゃんじゃない」とその時は言ったのですが、その後、家に戻って今まで手放せなかった哺乳瓶を自分から手放して、「今日は飲まずにネンネチュル」と言って自分から哺乳びんを手放しました。翌日には、「ゆう、赤ちゃんと違う、お姉ちゃんとオナジネ」と言いました。これは、ナラティヴです。子どもが自分で自分を定義して、自分はもう「赤ちゃん」ではない、お姉ちゃんと同じ「子ども」になったとい

う物語をつくって、自分を変えたのですね。

このように、自分で自分をつくって、自信になっていくことばや物語が大切だと思います。それから、子どもの語りには、子どもなりの世界観があるので、子どもの声、子どものことばに耳を澄ましていると、本当に分かってきます。今までことばの発達の研究では、いつ何ができるかという能力に焦点があてられてきました。子どもが一体何を語ろうとしているのかということに耳を澄ますと、とても面白い世界が見えてきます。自分で自分に言いかせていることばというのは、とても大事です。自分は強いとか自分はがんばり屋だなど、自分で自分を定義するようなことばが自分をつくっていきます。そういう意味で、子ども学とことばの力、物語の力、イメージする力みたいなものがうまくリンクして皆さんの胸に届けばいいと思っています。

一色：ありがとうございました。では、学生の方で自分の人生を考えたこともあるでしょうし、自分が近い将来、教員、保育士になった時にイメージみたいなところで考えたこともあるかと思います。学生および学科の先生で何か質問、コメントなどありますか。

稲垣：総合子ども学科の稲垣です。やまだ先生、小林先生ありがとうございました。実は、最近、脳科学的には、脳は複雑系で自己組織化するという考え方があります。コホネンのマップというのが複雑系の解釈する理解、科学的に解釈する原点だといわれています。そのコホネンのマップというのが、実は視覚なのです。視覚を中心として自己組織化する理論を考えているのです。それを今ふと思い出し、やはり視覚なのだと感じました。文字も形、所謂視覚です。音は聴覚ですが、ビジュアルというのは、正に視覚から入っていて、先生が組織化されているとおっしゃった意味合いとコホネンのいう組織化とは少し違うかもしれませんが、随分と一致している部分があると感じました。先生が、親子の関係をビジュアル化されている。時間軸を一つ軸として、次元が、私たちは空間、縦、横、高さの三次元で物事を考えがちですが、そこに時間軸という次元を四つ重ねていて、そのイメージ化をしていることにどのようにして気付かれたのかお聞きしたいのです。それから、著書を拝読していないので、申し訳ないのですが、「私をつつむ母なるものイメージ画に見る」というところで、母と子どもの関係性、この基本的なものがあるとおっしゃいましたが、これは、人間の関係性というと、心理学的にいうと、ケアするという関係性のものの関係性なのか、それとも人間の関係性の響きあう社会性、関係性なのか、その辺り全部がナラティブの話だと思うのですが、なぜ、やまだ先生がそこに目を付けられたのか教えていただきたいと思います。

やまだ：ありがとうございます。視覚を中心にして組織化するのは、まだ、多分、これからいろいろなところでもっと出てくるのではないかと思います。私たちは、ウィーン大学の先生たちとナラティブ・ターンの後はビジュアル・ターンだと言っています。ナラティブ的な見方は世界観を変革し、21世紀からのそれをナラティブ・ターン（物語的転換）と呼んでいます。その前には、コグニティブ・ターン（認知革命）というのがありました。私たちは、コグニティブ・ターンの後の、ナラティブ・ターンの後は、ビジュアル・ター

ンだと言っています。そういったビジュアルを中心にものを見ていく見方から、もっと面白いものが発見できるのではないかと考えています。

それから、時間軸ですが、私は発達心理学を専門としています。発達という概念をどのようにして定義するかなのですが、基本的には、人間を今ここにあるものだけではなくて、時間的な変化のプロセスで見ていく学問であろうと思っています。だから、今ここにいて、なぜこの子はこんなに勉強をしてくれないのかと見た時に、その子どもの今の状態だけを見てどうこういうのではなくて、その子どもの過去、その子どもの未来像まで考えて、今は、こんなに困る子どもだけれども、きっとずっと困る子どものままではないだろうという見方をします。他の子どもを傷つけてしまって、なぜ、この子どもはこんなに攻撃的なのかといわれた時に、ずっと攻撃的な子どもではない。今は確かに、自分の気持ちをうまく言えないけれども、その内、変わるでしょうと私たちは見るわけです。子どもを見るとき、常に時間軸を入れて私たちは見ていて、そういう意味で時間軸は、とても大事なものであると思っています。生涯発達の場合は、その時間軸をよりスパンを長くしている。人生全体に長くしているわけです。時間軸というのは、発達の的にものを見ていく時、あるいは子どもを見ていく時には、切り離せないものではないかと思っています。

関係性ですが、これも、話すと長いお話になりますが、今では、人間を見る時に、個人、インディビジュアルで見てきた。インディビジュアル（個人）というのは、これ以上分割できないものという意味です。インというのはノットで、ディビジュアルはディバイド（分割する）という意味ですから、個人とは、これ以上分割できないもの、究極の単体です。元々アトムと同語源です。ですから、アトム、原子、究極の単体として個人という概念があります。その個人と個人で世界が構成されるのが従来の人間観だったのです。それに対して、個から先にできるのではなくて、関係性の中に個があるという考え方が私の立場です。個人が世界を構成するのではなく、関係の中の結び目として、今私たちが生きているという考え方に転換しようと考えているわけです。ですから、分割して、できるだけ純粋な単体を見つけようという従来の科学の方法論に対して、関係性の中で見ていくという大きなものの見方の転換が、この関係性でみていこうというイメージ画研究の基になっています。

一色：ありがとうございました。他にいらっしゃいますか。

赤西：総合子ども学科の赤西です。先ほどのお話で、一枚の絵を見て説明するのに、数十巻の本が必要であるとおっしゃっていました。私たちの中では、一枚の絵というのは、切り取り方によりますが、保育の現場もその通りだと思います。数十巻書く理論は、大学で教えることはできると思います。ここにおります学生は、皆総合子ども学科の学生なのですが、ただ、最初に切り取られたものを見て、そこに興味、関心を持ったりというのは、感性が必要だと思います。これは、どうやって教えられるのでしょうか。それを是非伺いたいです。

やまだ：とても難しい質問です。本当に感性というか直感が大事だと思います。ぱっと見て、何か惹か

れるとか何かおかしいとか、そういった直感的なものです。そういうものは多分教えられるものではないと思います。しかし、全く学ばなくてできるものでもない。私は絵が好きで、美術館に行くのが趣味なのですが、やはりある程度見慣れてくる、あるいは良いものを見ていると、だんだんと磨かれていくということはあるのではないかと思います。知らず知らずの内に私たちは、日常生活の中でもファッションのセンスにしろ、色のコーディネートにしろ、皆かなりのセンスを持っているのではないかと思います。だから、全くゼロから出発するのではなくて、既にある程度の感性を、それぞれ多少いろいろ得意分野などは違うと思いますが、ある程度身につけているでしょう。それを磨いていけば良いわけです。

絵も説明は要らないとよく言われますが、でもそうではなくて、やはり、フェルメールの絵は、ここは凄いといわれると、そうかという目で見ると更にものが見えてくるし、今度は、フェルメールの絵だけではなくて、他の絵を見た時に、光はこうなるのかというように、応用して見えてきます。やはり、ある程度教えることができるのではないかと思います。それから子どもに関しては、やはり、大人の視点ではない子どもの感性があるので、それに驚いて、楽しんでしまうことが大切でしょう。子どものことばにしろ、子どもの表現、子どもの問いは、未知の宝庫のようです。その面白さを楽しめることが感性を磨いていく近道かもしれません。

一色：どうもありがとうございました。では、ここで第一部を終了いたします。

【休憩】

一色：第二部を始めます。第二部では、地域の方とディスカッションをしていきたいと思います。これまでのお話を伺ってご意見とかご質問などございますでしょうか。

一般A：今日は貴重なお話をありがとうございました。イメージ画を使って、多様性を理解させるのと、未来から現在を描いていくと考えた中で、どうやってイメージ画を描いていくのかを指導していけば、未来から現在をポジティブに考えられるのかと感性のお話がありましたが、私も今子育て中で、子どもに対してどのようにして感性を身に付けるのか、こういうことに気を付けているということがあればよろしくをお願いします。

やまだ：今、私は大学院生を教えながら、一緒に絵を描いてもらって語り合うという授業をしています。たとえば「私の人生」というテーマで過去と現在と未来の自分を描いてもらい、それを少人数でお互いに見ながらディスカッションをしてもらうという授業をしています。そうすると、ポジティブになることを直接教えなくても、他の人の絵を見ながら多くを学びます。なるほど、こういう人生もあるのか、このような見方もあるのか、こんなことは考えつかなかったなど、自分が描いたものをベースに、他の人の絵を見ながら、もしかしたら、自分をもっとこのように描けばよかったかなと思ったりする。それで十分ではないかと思います。だから、すぐに効果を求めないで、むしろいろいろな人生を味わってみる授業を

グループなどで進めていくのがいいかと思います。

ビジュアル・ナラティヴの良いところは、外在化されるから、みんなで観賞できることです。つまり外側にあるもの、目に見えるものだけを観賞すればよいので、描きたくないもの、秘していきたいものは、描かなくていいのです。それからこのような絵を描いた人は、こういう性格だというように、描いたものを本人の心理の分析として内面に返っていかないように注意しています。だから、何を描いてもいいし、なんでも表現していいのです。そして分析しない。このような絵を描いた人は、こういう性格ではないとか、最近孤立しているのではないかなど、分析も解釈もしない。何でも大丈夫ですよと言うと、自分でオープンにしたいものだけを描きます。最初から皆で見るといことなので、あまり気が進まないことは描かなくていいのです。それで十分です。目で見たものをお互いに見るので、外在化して共有できます。心の中を覗かれるのとは違います。心理学では、投影法といって、外にプロジェクトしてそれでその人の性格判断をしたり、パーソナリティを見る方法がありますが、それとは違う絵の使い方です。だから、絵は語りの素材の一つです。ある絵を描いたからすぐにポジティブになるというのではないけれども、いろいろなものを味わう一つの材料になる。そうすると自分が描いた絵をずっと自分で覚えていて、もっとこうすればよかったとか、あのようなやり方もあったなど自分でどんどん絵を生成していく、イメージを膨らませていきます。そのような自発的・生成的に物語を生み出したり、省察（リフレクション）する効果があるので、ビジュアル・ナラティヴは、授業に使えるのではないかと思います。

一色：では、他にいらっしゃいますでしょうか。

一般B：本日は、興味深いお話をありがとうございました。出版社に勤めている者です。今日のお話で、親子関係の過去、現在、未来をそれぞれ物語にして人間は持っているというお話はとても面白かったです。今日見せていただいた中では、関係が修復していく方ばかりだったと思うのですが、この物語は他にどのようなパターンがあるのでしょうか。それから、関係が修復されていくような家庭に不幸な過去があった場合、関係が修復されていくような典型的な例があれば教えていただきたいのです。

やまだ：母子関係というと、私たちはどうしても、良い母子関係と悪い母子関係があって、修復できないというようなステレオタイプがあるので、今日は特に、あえて、修復できる物語をたくさんお見せしました。他にも、物語としていくつもタイプがあります。まだ分析中ですが、一つは、過去と未来が逆転する物語があります。幼い時にお母さんに世話してもらっていた自分が、今度は逆に年をとったらお母さんが車椅子にのって自分がサポートをするなどです。形としては、いろいろですが、過去に例えば支える関係で、自分が支えてもらっていたのが、未来は自分が支える私になるとか、逆転して同じ構図が出てきます。そのように過去と未来が逆転して似てくる絵が一つのパターンとしてあります。これは物語の特徴なのかもしれませんが、私たちはそういうものがつくりやすいということもあるのかもしれない。もちろん、どんどんお互いに離れていってしまう物語もあります。幼児期には、くっついて依存していたのが、大人になるとどんどん離れて独立していく定型的な発達物語もあります。いろいろな物語の型が

あるのですが、今日は特に、幼い時にあまりハッピーではなかった関係を修復する物語に焦点を当ててみました。

それから、その修復のプロセスですが、絵だけでは修復のプロセスはわからないのですが、修復の例を一つお話します。私が書いた『ことばの前のことば』という本があります。それは、赤ちゃんはどうやってことばが出てくるかという本なのですが、それを読んだお母さんの一人からお電話をもらったことがあります。「自分はお母さんに虐待をされて育った。本当につらい幼児期であった。お母さんのことを思い出すと叱責されたり打たれたり嫌な思い出ばかりだったが、先生の本を読んで救われた」とおっしゃいました。その方は自分が虐待をされて育ったので、そういう心理学書を読み漁ったそうです。カウンセリング本をいろいろ読めば読むほど、ますます母親が憎くなって、嫌な体験をたくさん思い出して、ますます憎しみが増えた。けれども、たまたま書店で私の本に出会った。

それは普通の子どもの発達のエピソードが書かれた本で、虐待とは何も関係しない本ですが、それを読んで、一つだけ思い出したことがあるとおっしゃったのです。その方のお母さんが、靴を履くときに手を添えてくれた、それを私の本を読んでいる内に、ふっと思い出した。そうすると、日常的なところではお母さんが、良いこともしてくれた、自分のために何かしてくれた。その人にとっては、靴を履くときに手を添えてくれたという、一つの記憶が甦ったことが、とても大事で、それが思い浮かんだお陰でとても救われたとおっしゃいました。多分、その人の記憶の中では、90パーセント以上が嫌な記憶でオーガナイズされていたのに、そうではないところに目を向けると、お母さんも私をきちんと育ててくれたのだと思った。これはポジティブな部分に目を向けることで、人生物語を変えた転換のひとつの例でしょう。

一色：いかがでしょうか。他にいらっしゃいますか。

一般C：大阪から参りました。今から25年ぐらい前になるかと思いますが、今お話されていた『ことばの前のことば』を読ませていただいてこの本を書かれた方はどんな先生か是非お会いしたいと思い、上智大学のセミナーで講義されるということでしたので、参加いたしました。その時の先生と今ここにいらっしゃる先生は殆ど変わっていらっしゃいません。今日伺いたいのは、先生が京都大学に行かれてから書かれた本の中に、どこかの施設にお勤めの時にいろいろな悩み事を書かれているところがありまして、一生懸命オムツを替えたり、苦心して食べさせたりしている、そうやって子どもの調子がよくなったと思うと、偉い先生が来られて「大分よくなりましたね」と言って、私の苦勞を知らずに調子のいい時だけを見ていると書かれていたので、やまだ先生も、このようなことを書かれるのかと非常に親しみを感じました。私は教員で下積みの生活ばかりをしてきましたので、先生がこのようなことを感じながらも大成されたのだと思いました。やはり、今、偉い先生になられて、その途中のことをどのように感じておられるのか伺いたいと思います。

やまだ：ありがとうございます。偉い先生になった気はしないのですが、大学を出て、大学では基

礎的なねずみの実験などをしていて、臨床現場に行きたくて、愛知県の心身障害者コロニーというところで自閉症の子どもたち、ことばが出てこない子どもたちと格闘するような毎日でした。それがフィールド体験、現場の目というのか、私の研究の原点になっているのではないかと思います。あのまま大学院に行って、そのままアカデミックな場にいた生き方と根本的に違うように思います。一度現場に出て、子どもたちと一緒に汗を流して格闘した世界の中で、ことばがどうやってでてくるのだろうかというのが大きな疑問になり、大学院に入りました。それから、自分の子どもの子育てをしながら、発達心理学の本を読むと、嘘だとは言わないけれども、やはり本当に子どものことがわかって書いていない教科書がたくさんありました。そうすると、子どもの日常生活の方から、現場の目、フィールドの目を大切に、現場から物事を見ていきたいという思いが強くなり、質的研究をはじめました。今アカデミックな場にいますが、基本は変わっていないような気がします。

今回紹介したイメージ画も、できるだけ、生の現場の絵からものを考えていきたいと思っています。だから、学問をする時に、先に理論や形式的な抽象的なタームや概念からトップダウンで研究する方法とは異なる方法をとっています。日常生活の現場、私たちが生きている世界を大事にしながら、それを記述しながらそれをできるだけ学問にしていきたいというボトムアップの方法論です。ですから、自閉症の子どもをみていたときも、赤ちゃんを育てていたときも、今のようなイメージ画を研究しているときも、見かけは違うように見えるかもしれませんが、基本的なスタンス、ものの見方というのは、現場の日常生活を大事にしたいところは今も同じではないかと思っています。

一色：他にございますでしょうか。

一般 D：本日は、ありがとうございました。個人的な経験なのですが、私は 50 代を過ぎて、在職しながら、アメリカの大学院で英語教育を学んでおりました。そのサマースクールで 2 年経験しましたことは、すべて絵に描きなさいというやり方でした。アカデミックなところではなかったので、いろいろな国から来ている教師たちが集まっている授業でした。最初にしたことをとても戦慄に覚えているのですが、教育とは何かを 20 分で絵に描きなさいという課題が出ました。いろいろな絵をもちろん教授も描きました。皆が描いた絵を皆で話し合ったことを覚えています。それで発見したことは、その教授もとても悩んでいる絵だったので、先生も悩んでいらっしゃるのだと思い、いろいろな発見があったことを思い出しました。

それから、もう一つ、私自信は幼児の英語をずっとやってきましたが、そのやり方の中で、音楽を通して英語を学ぶというのがあるのですが、メソッドの中に線を書きながらマジックでいろいろなリズムに合わせていろいろな線を描くのです。するといろいろな線のラインが違うのです。それをお互いに交換し合って、それをなぞっていくという経験もしました。大きな紙の隅っこに小さく描く大柄のアメリカ人がいたり、小さな人でもとても伸びやかな線で描いたり、同じ曲でも感じ方、描き方が違うのだという経験をして、先生のお話を聞いてとても親近感が湧き、とてもよく理解できました。

やまだ：ありがとうございます。絵を描いて皆で語るとか、評価しないでこんな表現もあるのだということでお互いに学び合うのに絵は使いやすいように思います。ことばで話すだけですと、対話的にすぐに返せる人が優勢になります。しかし、目の前に絵を置いて、皆でそれを見ながら、ああこうだと話をするのは、三項関係をつくります。直接相手に話すのではなく、一つ媒介項をワンステップ置くことができて話しやすいのです。そういう意味で絵は教材として面白いのではないかと考えています。

それから、漢字と音の話ですが、先ほど小林先生ともお話したのですが、私は、やまだようこをひらがなで書いています。学生さんに既に私たちはバイリンガルを生活しているとよく言うのですが、日本語は本当に面白いことばです。やまとことばに目覚めたのは、『ことばの前のことば』を書いたころ、30代半ばころでしたが、名前をひらがなにしました。それはどうしてか。やまとことばはひらがなでできています。音というかヴォイス、声が響いてきます。だから「やあー、まあー、だあー、よおー、こおー」、「あ、あ、あ、お、お」と母音が立ち上がって響いてきます。

それに対して漢字は、ビジュアルなので、私の名前は「山があつて、田があつて、太平洋の洋子」です。そうすると、「マウンテン、ライスフィールド、オーシャン チャイルド」、これも海外に行ってそう説明するとすぐに覚えてくれます。とてもビジュアルになります。山があつて、田があつて、海に囲まれた子どもというのは、日本の原風景ではないかと言われます。この平凡な山田洋子が、なかなかいい名前だといわれます。

ひらがなと漢字は、それぞれ発想が違って、世界の意味づけ方やくくり方も違ってきます。例えば力の「ち」は、力という漢字にしてみると力の中の一部になります。しかし、やまとことばでは、血液の「ち」、力の「ち」、雷（いかずち）、みづち（蛇）、ちひろ（千尋）、そういうものにすべて「ち」が入っている。というのは、やまとことばのくくりでは、「ち」は、私たちの力を超えたパワーという意味です。ですから血液の「ち」も雷もみづちも力の「ち」も、皆もとは同じ意味内容です。それは、「ち」というひらがなを見ると見えてくる世界観です。ひらがなも漢字も、両方とも大事ですから、その両方の発想を使える私たちの日本語はなかなか面白いと思っています。

一色：ありがとうございました。では、他の方いらっしゃいますか。

一般B：度々すみません。今日のお話の中で出てきた母子関係、ネットワークモデルについてですが、この繋がり方は、どのようにできあがっているのか教えていただきたいのですが、お願いします。

やまだ：ネットワークモデルはいろいろなくくり方があって、このネットワークは、実は、三次元か四次元ぐらいにできるのだろーと思っています。だから、何と何が隣り合わせで、何と何がどう結びついてるのは、そんなに定型があるわけではないです。例えば、空間的に上にある、「打つ」お母さんも、「与える」お母さんも上部においています。今日はお話できませんでしたが、「打つ」お母さんと恩恵を「与える」お母さんは近いところに位置しています。だから、「打つ」お母さんは偉大なお母さんでもあり、ある時には、太陽のように恩恵を与えてくれるし、ある時には雨のように厳しく打ちつけるような二面性

を持ってみることもできるのではないかと考えています。そのように上にいるお母さんと、「並ぶ」関係の対等に並ぶお母さんは、少し違った位置にいるだろうというふうに並べています。だから、このネットの形がいつも正しいわけではなくて、他の結び方もあると思います。

このネットワークモデルは、いろいろ柔軟に使うものです。例えばある文化では、ネットの網目が細くなり、ある文化では粗くなるかもしれません。やぶれかぶれモデルと言っていて、要するに形が定型ではないので、研究目的によっては、どこかが破れているかもしれないし、どこかでまた新しい結び目ができるかもしれない。だから、ここの図で完結するわけではなくて、説明したい対象によって、もっといろいろな形ができるでしょう。あるいは、どこかが破れていて、結び目が今は見出せなくても、後で付け加わっても構わないという柔軟な網目と考えています。

休み時間に、学生さんから個別に質問があったのですが、心理学専攻の方で、このカテゴリーはどうやってつくるのですかという質問がありました。このネットは、結び目で、カテゴリーではないという説明をしました。カテゴリーは、ディバイド（分割する）、「分ける」という操作で成り立ちます。したがって、二つをどうやって分けるのか、二元分割、AとBを分けて、そして、AとBがどう違うのかと比較するのが基本の形です。私のネットワークモデルは、「分ける」操作ではなく、「むすび」によってできるものです。いくつかの、コアになる結び目はできます。しかし、それは引き出しに分けるようなカテゴリーではない。しかも、結びつき方のバリエーションはたくさんあります。

一般B：意味の近いものを繋げているという意味ですか。

やまだ：そういうことです。

一色：他にいらっしゃいますか。

一般E：根本的な質問なのですが、今回、関係イメージというのを子どもと母という形でご講演していただきましたが、子どもと父という形もあるかと思うのですが、なぜ、子どもと母親なのでしょう。

やまだ：母親というのは、やはり誰にとっても重要人物というか、キーパーソンになります。誰にとっても思い入れが深いということで、「私と母」の関係をコアに置いています。「私と父」というのも、イメージ画で描いてもらったことがあります。父親ですと、最近は変わってきているかと思いますが、ほとんどお母さんと同じパターンが出てきますが、少し影が薄くなる。点線で描かれたりする。お母さんですと、もたれる感じだけれども、お父さんの場合は、肩を抱いてくれるなど、少しぐさは違ってきますが、基本的なパターンはお父さんでも見られます。ただ、不在のお父さんというか、お父さんの絵を描いてくださいというのに、お母さんと自分がいて、お父さんは点線でいないというかそういう感じで描かれたりするのはお父さんの特徴かと思います。おばあさんとの関係、お子さんとの関係、それから三世代（おばあちゃんとお母さんと私）を描いてもらったりしているのですが、だいたい同じようなパターン

が基本的パターンとしてみられます。ですから、これは、基本的に母というのをベースにしていますが、母だけではなくて二者関係の基本パターンと考えてもいいのではないかと考えています。「私と先生」「私と友達」などにも使える、人間関係の基本パターンを研究していると思っています。その中で一番、誰にとっても思い入れの深い、大事な存在であるお母さんをキーワードにしています。

一色：今日のテーマはとても面白いテーマで「子どもと母の関係イメージと人生の物語—多文化研究から」ということで、やまだ先生が自分で掘り起こしてきたテーマであると思います。やはり、イメージ画をみていく、そこで関係性みたいなものが見えてきて、それでその後、人生の物語、経験を編集して組織化していくというお話を伺いました。これは、実は、私はNHKで番組制作をしていましたが、正に番組制作をするのは、いろいろな情報、経験を集めて、編集してそして組織化して、そして一つのメッセージを出していくので、この研究とコンテンツは似ていると思いました。それと物語の力で関係性を改善していくことができることと、お二人の先生が言ったそういう関係性を改善していくことができるのは、日本人が一番世界に向かって言えることではないかと思ったのです。そのベースはお二人が言った漢字仮名まじり文、やはり両方の感性と理性とを持ち合わせているのではないかと思います。今後このような研究が進んでいくと、世界の中で日本もまた活性化していくのではないかと思います。本日はありがとうございました。これで終了いたします。